Yes　my　lord

桜木　桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｙｅｓ　ｍｙ　ｌｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ７６７５Ｍ

【作者名】
桜木　桜花

【あらすじ】
両親が離婚し、純はお金持ちの父方の祖父に預かってもらうことに。
学校で、人望も厚く、モテモテだった純は、二人の学校の男友達、そして、一人の執事に取り合いになってしまい・・・

《壱話》

《壱話》

母と父が離婚し、純は父に預けられることになった。今の家は出て、父は仕事でオーストラリアに行くので、父方の祖父に預けられる。自分で預かるって言ったくせにと純は思っていた。

父方の祖父には会ったことがない。何でも、大企業の社長だと聞いたことがある。父は母と離婚をしてから、祖父の会社を継ぐことを決心した。

学校の友達とは別れなければ行けない。母とも別れなければいけないし、父も海外へ行ってしまう。祖父もたぶん仕事で忙しいだろう。純は、一人になる。

そんなことを考えながら、思い足取りで純は学校へ向かう。

彼女は三上　純【みかみ　じゅん】、十七歳。高校二年生だ。

「純！転校するって！？何で？」

純が学校に着くと、純の親友の南　友紀【みなみ　ゆき】が言った。

純は、ちょっと笑って、

「親が離婚して・・・でも、ここから近いから、すぐに会いに来れるよ。今日で、ここに通うのは最後だけど・・・」

と言った。すると、クラスのみんなが集まって来た。

「純、放課後にバスケやろうぜ！」

バスケ部で一緒だった、井上　幸樹【いのうえ　こうき】がそう言った。純はニコッと笑ってうなずいた。

「一緒に卒業できないんだ・・・今度、みんなでどこかに遊びに行こうね！」

友紀の次に仲がよかった、苑田　葵【そのだ　あおい】が言った。

少し目が潤んでいる。

「葵・・・泣かないで。よけいに寂しくなるわ。」

純がそう言うと、男子たちに囲まれた。みんなスポーツ仲間だ。

「そりゃあ、女子たちにとっては、お前は王子様だったからな。スポーツ万能、頭脳明晰、困ってる女子を助けたり、男子と女子がもめるときはいつも女子の味方。でも、男子の味方もする、クラスのまとめ役立ったもんな。」
クラスの副委員長、奈波　仁【ななみ　じん】が言った。ちなみに純は学級委員長である。
「寂しいな。俺、純のことが好きだったんだけどな。」
仁が言った。純はビックリして仁を見た。
「どういう意味？」
「もう一回言うぞ。俺は、純のことが好きだ！」
仁が教室の外まで聞こえる大きさで叫んだ。クラスのみんなも、純もすごくビックリしてあとずさった。
「私、変な女だよ？」
「いや、俺には普通の女にしか見えない。」
真剣にそう言われたので、純は恥ずかしくて、赤くなりながら教室の隅にうずくまった。
「純、返事くれ！」
仁にそう言われて、純は、
「え、もうちょっと待って。」
と即答した。
「じゃあ、今の気持ちは？気が変わったら言ってくれればいいから！」
仁がそう言ったので、純は顔を上げて、
「ごめんなさい。」
と言った。仁は、ニコッと笑ってうなずいた。
　放課後、約束どおり幸樹と公園でバスケをした。
「なぁ、またバスケできるよな？」
１ｏｎ１で勝負した後に幸樹が言った。
「うーん、わかんない。」
純がそう言うと、幸樹が純の手を引っ張った。

「本当に違うところに行くのかよ。俺ら、来年は二人でキャプテンと副キャプテンを組もうなって言ってたじゃん。」
幸樹がそう言って、純の両肩をつかんだ。純は笑って、
「そうだったね。ごめん、約束を果たせなくて。」
と言った。すると、いきなり幸樹にキスをされた。純はみんなと別れるときには出なかった涙を流した。
「ごめん、嫌だった？」
幸樹に言われて、純は首を横に振って幸樹に抱きついた。
「純？」
「嫌だよ、みんなと離れるの。一緒にあの学校を卒業したかったよ！幸樹と一緒にキャプテンもしたかったよ！」
純はそう言って、思いっきり幸樹の胸の中で泣いた。
「純、俺も仁みたいに純のことが好きだよ。だから、いつでも戻ってきて。ずっと待ってるから。」
幸樹にそう言われて、純は何回もうなずいた。
純は、家まで幸樹に送ってもらった。
「この家もこれで見納めか。幸樹、今日はありがとう。なんだか、すっきりしたよ。じゃあね。」
純はそう言って家に入った。幸樹の後姿を見るのが、正直嫌だった。
純は、家具がなくなった家を全部見てまわった。家具は、お母さんの実家か、純やお父さんが住む家にある。
父には学校から帰ったら、ここで待つように言われていた。
『ピンポーン』
家のチャイムが鳴る。純が玄関に出ると、男の人が立っていた。二十代ぐらいで、身長は百八十センチはありそうだ。
「純お嬢様でいらっしゃいますね？私、貴女のお爺様である、三上　廉五郎様の使いとしてやってまいりました、武沢　蓮樹【たけざわ　はすき】と申します。今日から、あなたの執事を務めさせて頂きますので、よろしくお願いいたします。」
と言われて、純は自分でもビックリするほど素直にうなずいた。

《弐話》

《弐話》

車の中はとても静かだ。執事の武沢はあまり話さないタイプらしい。

「あの、武沢さん。私、なんとお呼びすれば？」

純が言うと、武沢はチラッと純を見て、

「呼び捨てでかまいません。もちろん、上の名前でも、下の名前でも。それと、敬語は使わなくて結構です。」

と言った。純は、なおも質問していく。

「執事の勤務時間って、どれくらい？」

「貴女のお爺様が、決めた時間は午前六時から午後十時ぐらいまでです。お嬢様が風邪をひいたときなど、緊急のときは二十四時間、だったりしますが。」

蓮樹はそう言って、ニコッと笑った。

「何歳？誕生日はいつ？血液型は？彼女はいるの？」

「今、二十歳です。生年月日は四月二十七日です。血液型はA型。ただいま独身で、彼女もいません。執事の仕事は忙しいですし、そういう関係になる女性も、近くにはいませんので。」

蓮樹はそう言うと、すごく爽やかに笑った。蓮樹はあまり執事っぽくないと言うか、純のタイプを現実にしたような人だ。幸樹に似ている。

「兄弟は、いるの？」

「兄弟ですか？今は母と父が離婚して、母のほうに預けられた弟が一人います。時々会っているんですよ。」

蓮樹がニコッと笑ってそう言うので、ちょっとどう答えたらいいのか分からなかった。

「そうなんだ。蓮樹は私とちょっと似てるんだね。」

純がそう言うと、蓮樹は笑いながらうなずいて、運転手さんから見

えないように、純にキスをした純はすごく赤くなった。
「もう、勝手にそういう事しないでね。私が命令してからにして。」
純がそう言うと、蓮樹は、
「Ｙｅｓ　ｍｙ　ｌｏｒｄ．」
と言った。純はどういう意味か全然分からなかった。
「何それ？どういう意味？」
「かしこまりました。と言う意味です。私が行っていた執事＆メイド養成学校では、主人から命令を下されたときはそう返事するように教えられたので。」
「そんな学校があるの？」
「はい。フランスやイギリスのほうに。私が行っていたのは、イギリスのほうです。英国紳士が多いんですよ。」
そう言われて、純は「へぇ」と言うしかなかった。そういう知識はあまりないのだ。
「ねぇ、執事って何でも言うことを聞いてくれるの？」
「勤務時間以外は、出来ることなら何でも。」
「いやらしいことでも？」
「主人に命令を下されれば、その使命を果たさなければいけませんから。」
そう言って、蓮樹は意味ありげに笑う。
「お望みなら、夜もご一緒しますよ。とびっきり甘いのをご馳走します。」
蓮樹はそう囁くと、止まった車から降りた。
「お嬢様、ここが今日から住んでもらうことになる家でございます。」
車から降りた純に、蓮樹はお城のような家を見ながら言った。
「ここ？」
「はい。では、こちらに。」
蓮樹はそう言って、車専用の門の右にある扉を開いて、純を中へ入れた。

「ねぇ、お父さんから、聞いた？」
純はそう言って、蓮樹の服の袖を引っ張った。
「体が弱いことと、心の傷を患っていると言うことは、聞きました。なぜ心の傷が出来たのかはわかりませんが。」
蓮樹はそう言って、「どうしたの」とでも言うような顔をした。
「じゃあ、聞いてないのね。体が弱いって言うけど、それは貧血をよく起こすって言うだけ。重傷なのは、お父さんが言う心の傷なんだけど・・・」

純はお母さんの弟、つまり純のおじの家に泊まることが多々あった。そして、中学に入ったとたん、おじに性的虐待を受けることが多くなり、始めは胸を触られるだけだったが、次第に触られたことがないようなところまで触られるようになり、ひどいときはおじのあれを入れられるようになった。それから、何ヶ月か経つと、今までゴムをつけていたのが、つけなくなってしまった。それで、妊娠してしまった。妊娠していることに気づいた初めの頃は、怖くてどうしようもなく、誰にも相談できなかったが、あるとき純の異変に気が付いた友達三人が、相談に乗ってくれた。一人は女子で友紀。後の二人は男子で、幸樹と仁。
「何か悩みでもあるの？言って。私たち親友でしょう？男子にいえないことなら、二人にははずしてもらうし。」
親友がそう言ってくれたから、純は思い切って妊娠のことを打ち明けた。男友達二人にも。三人とも、純の話を聞いて唖然としていた。
「と、とにかく、早く自分の親に言って、おろさないと。気分が悪いのを我慢していても、どうしようもないだろう。」
仁がそう言ったが、純は誰かに言ったらもっとひどいことをすると言われていた。今思えば、両親に相談しておじに会えないようにすればすむ話だった。だが、そういう事を考えるのも無理なぐらい、怖かったのだが、幸樹が、
「脅されてるの？それなら大丈夫だよ。俺らが守る。」

と言ったので、両親に打ち明けられたのだ。その三人のおかげで、子供をおろすこともでき、今は少し安心している。

「・・・でも、まだ、怖いの。このことはね、家族とその三人、そして蓮樹と純だけの秘密よ。」

純はそう言って、蓮樹に笑いかけた。蓮樹はビックリしたような顔をして、キスをした。

「お嬢様、ご無礼をお許しください。でも、私はお嬢様を愛しています。」

そう言われて、純はビックリした。今日会ったばかりのはずなのに、愛していると言うのは、なんだかおかしいような気がすると純は思った。

「え、でも、今日会ったばかりだよね？」

「いいえ、私は少し前にあなたに会ったことがあります。一週間ぐらい一緒にいました。」

蓮樹にそう言われたが、純は何も分からなかった。

「そのうち分かります。さ、家に入りましょう。」

純は蓮樹に背中を押されて、そのまま家に入った。

《参話》

《参話》

その日の夜、純は家を抜け出した。一人で大きな部屋で寝ていると、変に怖くなったからだ。純は漫画喫茶で一夜を過ごすことにした。純はドリンクを飲みながら、漫画を読んでいた。

「純、こんなところで何してんだよ。」

そう声をかけたのは幸樹だ。そして、純を抱きしめた。

「外は寒いのに。」

「コート着てきたもん。」

「それでも、ここで寝泊りするつもりか？もう十二時だぞ？」

そう言われた純は、ニコッと笑って、読んでいた漫画を閉じた。

「じゃあ、泊めてくれるの？」

「え・・・はぁ、仕方ないな。女の子をこんなところに残しておくわけにはいかない。」

そういうわけで、純と幸樹は幸樹の家に向かった。幸樹の家に着くと、幸樹はすぐに純に抱きついた。

「幸樹？」

「ずっと理性を保ってたんだけど、もうおさえきれない。」

そう言って純にキスをした。そして、純の舌と絡めた。

「はぁ、はぁ、待って。幸樹のお母さんは？」

「俺、一人暮らしだから。」

幸樹はそう言って、また純と舌を絡める。そして、二人はベッドで重なり合った。

次の日、純は熱を出して、幸樹のベッドで寝ていた。

「ごめんな。あの時早く寝ていればよかった。」

「いいよ。それに、ごめんね。風邪うつったかも知れない。」

「気にするな。」

そう言って、幸樹は純にキスをした。そして、純の頬に自分の頬を

くっつけた。
「肌が気持ちいい。」
そう言って、幸樹は純の頬にキスをした。
『ピンポーン』
「誰だろう。ちょっとごめんね。」
そう言うと、幸樹は立ち上がって玄関へ行った。純はずっとベッドに横たわっていたが、十分しても幸樹が戻ってこないので、純は玄関に行った。
「蓮樹！」
純は玄関で幸樹と話していた人物を見て、そう叫んだ。
「お嬢様。なぜ家を抜け出したのです？」
そう言って、蓮樹は純に近づいた。
「・・・とりにするから。」
「え？」
「一人にするからじゃない。お父さんには会えない、お祖父様にも会えない。広いダイニングで一人だけで食事して、広い部屋の大きなベッドに一人で寝かされて、私が耐えられると思う？」
純はそう言うと、靴を履いて幸樹の家を飛び出した。すぐに、幸樹や蓮樹が走って追いかけたが、純には追いつけなかった。
　純は自分の広い家に帰ると、財布や通帳、服や下着をカバンに入れて部屋を出た。

《肆話》

《肆話》

純はすぐに母親のところへ行った。

「お母さん！」

母親はマンションに住んでおり、純が来るとすぐに歓迎した。

「純、いらっしゃい。」

そう言って、母親は純を家に入れた。

「どうしたの、純。相談に乗るわよ。」

「・・・家に帰っても、一人ぼっちだから。」

「そう、あの人、また放ったらかしにしてるのね、家族のこと。お祖父さんの性格に似て。」

「お祖父様もそうなの？」

「そうよ。だから、あなたのお祖母さん出て行ったんだから。」

「そうなんだ。」

そう話しながら、二人はテーブルを挟んでコーヒーを飲んでいた。

『ブルルル　ブルルル』

突然、純の携帯が震えた。マナーモードにしてあるので、バイブだけが聞こえる。

「もしもし？」

『もしもし、お嬢様ですか？早く帰ってきてください。』

「嫌だ。戻ってきてほしければ、私を見つけることね。じゃあ。」

そう言って、純は電話を切った。

「お母さん、ヤバイ。吐き気が。」

そう言って、純はすぐにトイレへ行った。

「大丈夫、純。」

「そういえば、私熱が出たんだっけ。」

「部屋で寝てなさい。ご飯作ってあげるから。」

「ごめん。」

そう言いながら、純は母親の部屋で寝た。
純が起きると、蓮樹が純の手を握って眠っていた。
「蓮樹？」
純は起き上がって部屋を見渡した。純は屋敷の自分の部屋にパジャマを着て寝ていた。純は蓮樹を見て額にキスをした。すると、蓮樹は目を覚まして、純にニコッと笑いかけた。
「お嬢様、体調はどうですか？」
「いいわけないでしょう。いつも寝ているベッドじゃないし、布団も全然違うんだから。」
純がそう言うと、蓮樹はあきれたような顔をして、純の額にキスをした。
「夕食を作ってきますね。」
「待って、蓮樹。」
純はそう言って、蓮樹を抱きしめた。
「お嬢様？」
「一緒にいて。」
純がそう言うと、蓮樹は少し怒ったような顔をして、
「幸樹を呼んできます。幸樹としたんでしょう？」
と言った。純は赤くなってうなずいた。
「え、そうだけど、幸樹のこと、何で知ってるわけ？」
「弟なんです。もういいですか？幸樹を呼んできますから。」
そう言って、蓮樹は無理やり純を引き離した。蓮樹が部屋から出て行くと、入れ違いに幸樹が入ってきた。
「大丈夫、純。」
そう言われて、純はゆっくりうなずいた。すると、いきなり幸樹が純にキスをし、舌を絡ませた。
「や、はぁ、幸樹。もう、このバカ！」
純はそう言って、幸樹に抱きついた。
「バカ、そ、そんなことしたら、理性がとぶ！」
「とんじゃえ、とんじゃえ！」

純がそう言うと、幸樹はすぐに純を押し倒した。
「バカ。そんなこと言ったら、もう・・・」
幸樹はそう言って、舌を絡めた。そして、純のパジャマを脱がせ始めた。そして、自分も服を脱ぐと純と抱き合った。
　蓮樹は料理を作り終わると、純の部屋に行ったのだが、純の喘ぎ声が聞こえたので、怒りながらキッチンに戻った。
「蓮樹さん、どうしたんです？」
メイドがそう言った。蓮樹はそのメイドを見て、壁に押し付けた。
「ねぇ、好きな人が自分の兄弟と抱き合ってたら、どう思う？」
「い、嫌ですね。蓮樹さん？どうされました？」
そう言って、メイドは蓮樹を押し離す。
「どうしたも何も、お嬢様が私の弟とあんなことやこんなことをしてたんです。」
「蓮樹さんはお嬢様が大好きですからね。そう言えば、どうして蓮樹さんは、お嬢様が好きなんですか？」
メイドはそう言って、キッチンにあるイスに座る。蓮樹は壁にもたれて、ため息をついて、話を始めた。

昔、蓮樹が留学する二週間前、つまり今から八年前。仲がよかった蓮樹の家族と純の家族で一緒にキャンプに行った。一週間キャンプですごしたが、最後の日に純が行方不明になってしまい、みんなが探し回った。もちろん蓮樹も探したが、山の中だったので、足を滑らせて山の斜面を落ちてしまった。落ちたところには川があったが、元の場所に戻れるようなところがなく、とりあえず、蓮樹は川の水で顔を洗って、考え事をしていた。そうしていると、隣から誰かが蓮樹に抱きつき、蓮樹が見ると抱きついてきたのは純だった。蓮樹はすぐに純を抱きしめた。
「純、ずっとここにいたのか？」
「うん、そうなの。川に入ってたら、ここに流されちゃって。私、一生懸命泳ぎの練習してたの。」

そう言っている純は、濡れていて唇が紫色になっていた。純は水着姿だった。蓮樹は、自分が着ていた薄い長袖の上着を純に着せた。
「寒いだろ？今から火、つけてやるからな。」
そう言って、蓮樹は持っていたマッチで火をつけた。
「ごめん、純。俺、マッチしかもって来てないから、助け呼べないかもしれない。」
「いいよ。お兄ちゃんがいるだけで十分。」
そう言って、純は火に手をかざして温まった。それを見ながら、蓮樹は切なそうな顔をして、ニコッと笑った。
「純、純にはまだ行っていなかったけど、俺、イギリスに行くんだ。」
「そうなの？私も行く！」
純はそう言って、目を輝かせたが、蓮樹が横に首を振ったとたん、嫌そうな顔をした。
「何で？私、お兄ちゃんと結婚するって、約束したもん。だから、私もついていく。」
純がそう言うと、蓮樹は純にキスをした。
「じゃあ、俺がイギリスから帰ってきたら、結婚しような。」
「うん！絶対だからね。」
そう言って、純は蓮樹に抱きついた。
「うん、絶対。これ、約束のペンダント。」
そう言って、蓮樹は純に自分が持っていた、十字架のペンダントをわたした。
「私、ずっとこれ持ってる。」
そう言って、純は蓮樹の胸の中で眠った。

「と言うわけで、一応、私とお嬢様は婚約をした仲なんです。」
蓮樹はそう言うと、メイドは何かを思い出したような顔をした。
「お嬢様、今でもそのペンダント、身につけていらっしゃいますよ。私がお嬢様のお着替えをしていたときに、首からペンダントを提げ

ていらっしゃいましたから。」
そう言って、メイドはニコッと笑った。
「そうですか。」
蓮樹はそう言って、自分の部屋に行った。
純は幸樹と一緒に裸で眠っていた。
「ん・・・」
純は目を覚まして、幸樹を見た。もう十時だ。
「幸樹、起きて。」
そう言って、純は幸樹を起こした。幸樹は起きるなり、純を押さえつけて、舌を絡ませた。
「さっきから気になってたんだけど、そのペンダントは何？」
「・・・昔、結婚を約束した人からのプレゼント。もう、八年も前だけど。私、『お兄ちゃん』って呼んでたんだけど、誰だったか覚えてないんだ。イギリスに行っちゃって、もう、帰ってきたかも分からない。」
「兄貴のことじゃんか。昔、お前が『お兄ちゃん』って呼んでて、イギリスに留学していた人。武沢　蓮樹。」
そう言って、幸樹は服を着て、どこかに行った。純も服を着て、部屋を出た。

《伍話》

純は蓮樹の部屋の戸を叩いた。すると、私服の蓮樹が現れた。
「何ですか、お嬢様。今機嫌が悪いんです。」
「ごめんなさい、お兄ちゃん。」
純がそう言うと、蓮樹は赤い顔をして、
「思い出したんですか？」
と言った。純はゆっくりうなずくと、蓮樹を抱きしめた。
「一緒に寝よう。」
次の日、二人は一緒に寝ていた。
「お嬢様、お嬢様。」
純は蓮樹に起こされて、目を覚ました。
「蓮樹・・・おはようのキスは？」
そう言って、純はニコッと笑った。蓮樹はあきれたように微笑んで、純の唇にキスをした。
「早く服を着てください。」
そう言いながら、蓮樹は自分の服を着る。
「ねぇ、もう一回、キスして。」
「ダメです。今日はスケジュールがいっぱい溜まってるんですよ。」
「どんな？」
「あなたの服を買いに行き、あなたの気に入るようなベッドや布団を探しに行き、あなたのお祖父様とお父様のお迎えに行き、七人でのパーティーをし、あなたが夜寂しくないように一緒にいなければいけないんです。」
そう言うと、蓮樹は純のカーディガンを渡しながら、
「おやすみのキスでいいでしょう？お嬢様。」
と言って自分の部屋を出た。純はカーディガンを着て、自分の部屋に行くと、青いワンピースを着た。そして、部屋を出るとメイドがニコッと笑って立っていた。

「えっと・・・なんて呼べばいいかな？」
「マリでいいですよ、お嬢様。蓮樹様が待っています。」
それを聞くと、純はニコッと笑って頭をおさえた。
「うん。それは分かっているけど、頭が痛い。頭痛薬があったら持ってきてくれないかな？」
「かしこまりました。」
その言葉を聞くと、純は頭をおさえたまま、壁にもたれかかって、マリを待った。
「お嬢様！どうかされました？」
そう言って、蓮樹が純に駆け寄ってきた。
「ううん。大丈夫。先に行ってて。」
「一緒にいます。」
そう言って、蓮樹は純の横に立った。
「お嬢様、持ってきましたよ。」
そう言って、マリが水と薬を持ってきた。
「ありがとう、マリ。」
純はそう言って、薬を飲んだ。だが、薬を飲んだ後に、ふらついたので、蓮樹はそれを支えた。
「大丈夫ですか？今日は買い物をやめましょう。」
「いいわよ。どうせあのベッドじゃ、休めないわ。」
純はそう言うと、すぐに自分でたった。
「あまり、無理しないでくださいね。」
「うん。じゃあ、行こう。」
そう言って、純は歩き始めた。蓮樹は純の隣を歩いて、純が倒れないように気をつけた。
　純は車で後ろの座席に横たわっていた。
「大丈夫ですか？お嬢様。」
「うん。」
純はそう言って、ニコッと笑った。
「もうすぐで着きます。」

蓮樹はそう言うと、車を右折させた。純はそのまま眠った。
「お嬢様、起きてください。」
「もうついたの？」
純はそう言って、起き上がった。蓮樹は純の頬を触って、下まぶたを裏返した。
「大丈夫ですか？すごく顔色が悪いですが・・・」
蓮樹がそう言うと、純はうなずいて、車から降りた。
「大丈夫、大丈夫。」
純はそう言って、しっかり立った。
「ね？」
純がそう言って、蓮樹を見ると、蓮樹は純を抱きしめた。
「蓮樹？」
「まったく、お嬢様はかわいすぎますよ。反則です。」
蓮樹はそう言って、純をもっときつく抱きしめた。
「お兄ちゃん。」
純がそう言うと、蓮樹は我に返ったような顔をして、純に頭を下げた。そして、顔を上げた。
「すみません、お嬢様。執事のぶんざいで、あんなことを・・・。」
「別にいいよ。」
純が笑うと、蓮樹は安心したようにため息をついた。
「じゃあ、行きましょう。」
蓮樹はそう言って、歩き始めた。純はそれについていく。
店に入ると、たくさんのベッドや布団が並んでいた。
「あ、この枕！家で使ってた枕と同じ。」
そう言って、純は枕を触った。蓮樹はそれを見て、カートに枕を入れた。
「さて、枕は見つかりましたね。次はベッドと布団です。行きましょう。」
蓮樹はそう言って、足早にベッドと布団がおいてあるコーナーへ行った。そして、純に自分のおすすめのベッドを教えた。

「これは、あなたのお婆様である、静子様が使われていたベッドなんです。」
蓮樹はそう言って、桜の花がところどころに彫ってあるベッドを純に見せた。
「桜、カワイイね。」
「はい、静子様も、大変気に入ってらっしゃいました。」
「じゃあ、ベッドはこれにする。」
純はそう言うと、布団のところへ行った。
「枕カバーは桜の花の柄がいい。布団はピンク色。」
純はそう言って、周りを見渡した。すると、目当ての布団があったのか、そちらのほうへ行った。すると、いきなり蓮樹が純を抱きしめて、そのまま伏せた。すると、純の心臓があった位置に、ボーガンの矢が刺さっていた。
「え？何、あれ？」
純が体を震わせながら言うので、蓮樹は自分の上着を純に着せ、純を足早に車へ連れて行った。
「お嬢様、買う物は、さっきご覧になっていたものでいいですね？」
そう言われて、純は震えながらうなずいた。
「では、買ってきますから、ここから動かないでくださいね。」
「待って。」
蓮樹の着ているシャツの袖を引っ張って、純は蓮樹を離さないようにしていた。
「私も行く。」
「ダメです。お嬢様は命を狙われています。」
「それでも。今、離れてほしくない。」
純がそう言うと、蓮樹はため息をついて、純の手を握った。
「あまり、私から離れないでください。」
そう言って、蓮樹は店の中に入った。
買い物が終わると、すぐに蓮樹は車を出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7675m/

Yes　ｍｙ　lord

2011年7月27日23時33分発行